

## 医師卒後臨床研修制度の影響を受けて 高山赤十字病院からの報告

高山赤十字病院 院長

○<sup>たなほし</sup>棚橋 <sup>しのぶ</sup>忍

高山赤十字病院は岐阜県北部の二次医療圏飛騨にあります。大正11年に赤十字病院となり、以後飛騨地域の中核病院として地域医療に貢献してきました。現在稼働病床は464床で、稼働率約80%、平均外来者数は877名、救急外来患者約16,000人、救急車搬入台数は約2,500です。救命救急センター、地域周産期・母子センター、災害拠点病院、地域がん診療連携拠点病院に指定されていますが、二次医療圏飛騨は東京都以上の面積があるものの、人口は約16万人（高山市・飛騨市合わせ約13万人）、岐阜から特急で2時間の距離にあり、やや特異的なへき地です。

当院が臨床研修病院に指定されたのは、昭和56年で、自治医科大学出身者を中心に研修医を受け入れてきました。平成16年新臨床研修制度が始まり、平成16年6名、平成17年4名、平成18年5名（中断者受け入れ1名）、平成19年5名、平成20年4名を受け入れています。地元岐阜大学からの研修医は少なく、平成20年度は0でした。臨床研修医の確保のため、現在実施しているのは岐阜大学、京都大学からの学外実習の受け入れ（宿泊は看護師寮で無料）、春季・夏季の病院見学・研修の受け入れ（宿泊は看護師寮で無料、交通費1万円支給）、本社が後援している合同説明会に出席しています。病院見学・実習に来た学生へ研修に関する情報提供、年賀状、国試時の励まし状、事務担当者のきめ細かい対応等を実施しておりますが、当院のような地方の病院に研修医を確保するためにはプログラムの充実、肉声、肉筆等を介したアプローチは効果があります。なお、本年度は後期研修に3名が残り、診療・救急に活躍しています。

新臨床研修制度が発足前後して、医師の引き上げが始まりました。平成17年度に血液内科、神経内科が常勤から非常勤に変更になり、平成18年度外科医9名から1名の減員、さらに平成19年度より外科が8名から5名になりました。この外科の減員は大きく、もともと麻酔科の常勤が無い当院にとって打撃は大きく、外科が行っていた他科麻酔ができなくなり、非常勤の麻酔科医の確保が必要になりました。平成19年には産婦人科の3名より2名の減員（現在は3名に復帰）リハ科医師、心療内科医師が不在になっています。

現在地域の病院の医師不足も深刻で、他の総合病院において日常診療、救急を中止せざるを得ない状況が続いております。そのドミノ的影響で、当院への救急車による患者の搬入台数が平成16年度まで2000台以下であったものが、平成19年度には2500台に増加し、また心カテができる施設が当院のみとなり、医師の疲弊感を生んでいます。

飛騨地域の将来の医療の確保のため、平成20年度より岐阜大学、岐阜県の音頭の下、岐阜大学のほか岐阜市の臨床研修病院から2年目の地域医療研修〈さるぼぼ研修〉の協力施設になり、地域医療の実際を見てもらうため診療所および当院での地域医療研修を開始しました。

高山市は観光では世界的に有名ですが、典型的な少子高齢化地域で、人口の自然減が数年前より始まっています。このような中で、新臨床研修病院制度が与えたインパクトは強いものがありますが、地域の病院、医師会と協力し医療の確保を模索しています。